
俺と九尾の女の子

茜空 裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と九尾の女の子

【Nコード】

N5776U

【作者名】

茜空 裕

【あらすじ】

山奥にある小さな町に住む高校1年生の徳野秀輝は都心に行く為に生活費を求めてバイトを始める。

ある秋の日、バイト（正確には依頼）を受けて近く山へと茸を求めて登った。

しかしその山は別名『迷い山』やら『妖怪山』と言われており、そこに迷い込んだ者は妖怪に食べられると噂されていた・・・が信じ

る者も殆ど居なかったとか。

そして案の定迷子になってしまった秀輝。 出口を求めて彷徨ってさらに山の奥へと迷い込んでいく。

そんな中、秀輝は偶然にも一匹の金色の狐を見つける。

狐は足に傷を負っており、何かに脅えていた。

しかしその狐、尻尾を1，2，3，4・・・9本も持っていたのだ。

秀輝はその狐が九尾だと気付いたが足の傷が酷く、家に連れて行き九尾の足の傷に消毒をして包帯を巻いてやった。

その後、流石に疲れてぐっすりと寝たが・・・モフモフとくすぐったい感触に目が覚める。

そしてすぐ隣には金髪の可愛い女の子が・・・。

01 些細なきっかけ（前書き）

＊今作品はUP主の中途半端な知識を振り絞って書いた作品です。
過度な期待はしないでください。（まあ、期待する人なんていない
と思うけどね！

01 些細なきっかけ

私、『徳野 秀輝』^{とくの しゅうけい}はあまり有名じゃない県の中にある山の奥にあるド田舎とまではいかないがとても小さな町に住む健全な育ち盛りの高校1年生だ。

あ、一応言っとくけど男性ね？

小さな町ではあるが、別に爺ちゃん婆ちゃんばかりで俺みたいな育ち盛りの高校生が全く居ないということはない。

小さな町ではあるが、活気溢れていて人口もそこで年齢層のバランスも取れている良い町のお手本といっても良いぐらい良い町だ。

しかし俺は、高校生活が終わったらすぐにこの町を出て行くつもりだ。

いくら良い町だといっても小さいから仕事も少なく、稼ぎもままならない。

そんなところで働く気はさらさらなかった。

高校に入ってからすぐに都心に行く為の金を集めていた。

色々なバイトを始めて、都心でもちゃんと生活できるように親に頼んで一人暮らしをさせてもらった。

そして今は高校に入って初めて迎える秋。

勿論、スケジュールはバイトでいっぱい。

そんなある日、バイト（というか依頼）で何故か山に茸を取りに行く事になった。

依頼主のおっちゃん曰く、『腰が痛くて歩けやしねえ・・・』だそうだ。

歳は取りたくないもんだね・・・としみじみ思いながら、おっちゃんのを教えてくれたルートを通して山に入って行った。

その日をきっかけに、俺の人生は一変した。

01 些細なきっかけ（後書き）

この小説を読んでいただき、誠にありがとうございます。

小説を書くのは初めて・・・というわけでもありませんがこちらのサイトでは

初作品となります。

色々に変な作品になると思いますが、これからも宜しく願います。

02 キノコの誘惑（前書き）

＊ まさにキノコ回。

02 キノコの誘惑

俺は山の奥へ奥へとドンドン進んでいった。

普通なら山奥へと突っ込んでいくなんてためらうだろうが、おっちゃんのを教えてくれたルートだし大丈夫だろう、とのん気なことを考えていた。

しばらく進むとお目当てのキノコを見つけた。

すぐさま採集を始める。

「・・・少ねえ」

ただしキノコは望んでいる程多くはない。

駄目だろ、こんな量じゃ。

新たなキノコを求めてキノコ探しを再開する

しかし中々見つからない。

キノコどころかその辺に勝手に生えてきそうな木の実さえ見つからない。

・・・おっちゃん、本当にこのルートで良かったのか？

そんなことを疑問に思いながら早1時間。

「・・・お、あれは・・・もしや！」

キノコ探しを諦めかけていたその時、やっとの思いでキノコの群れを見つけた。

先程の貧弱少数キノコ部隊とはまるで違い、もう1本1本が空き缶ぐらいの大きさでもうこの1セットでパーティが出来るんじゃないか？と思うぐらいたくましいキノコだ。

貧弱なキノコやらたくましいキノコやら、何だか卑猥に聞こえるのは全て気のせいです、気にしてはいけません。

これほどにキノコを見つけただけで身も心も震えたのは人生で一度だけで良い。

さらに辺りを見てみればたった数m程先にキノコの群れが、その向こうにもキノコの群れ、そのまた向こうにもそのまたずっと向こうにも、キノコが直線になるように並んでいる。

それはまるで人を山奥へと迷い込ませるかのように並んでいた。

俺は無我夢中にキノコを採った。

本来進むべきルートから大きく離れている事にも気付かずに、だ。

いや、無理もなかったのかもしれない。

（うっは、凄えキノコ！キノコ王国がこんなところに！こんなデカイと某配管工のゲーム思い出すな、食ったら一気に成長しそうだ！これだけあったら報酬金どころかチップも貰えっかも！？）

頭の中はキノコのことではいいいいだった、情けねえ・・・。

キノコに釣られて俺は山の奥深く、決して人が入らないような場所に迷い込んでしまった。

02 キノコの誘惑（後書き）

続けられる自信がない・・・（やりますけどね。

03 迷い山と迷子の高校生

それからほんの1、2時間後のことだ。

俺は完全に迷子になっていた。

誰が何と言おうと迷子の高校生だ。

「・・・・・・・・」

油断もクソも無いが油断した。

あのキノコロードは罠だったのか。

自分のことながら情けねえ。

ルートから外れて山奥に迷い込んだと気付いたのは30分ほど前のこと。

視界に入ったキノコを片っぱしから採り尽くし、いざ帰ろうと思った時には道が分からないことに。

適当に歩いてりゃ帰れるだろ、と思い山を下るつもりで歩いたが気付けば同じ場所に戻っていた。

無限ループに陥ったと分かった途端に頭を抱えた。

駄目押しとばかりに嫌なことまで思いだした。

そういえば、この山『迷い山』とか言われてたよな……。

迷えば永遠に出る事ができない山の迷宮……あ、もしかして俺詰んだ？

そんなことを思い背筋をブルブル震わせながらも改めて良く考えてみる。

いやいや、そんなのただの噂だろ。

まず永遠に出れない迷宮とかありえねーだろ、山の中だぜここ？

そう思い直して意気揚々と歩き回るが結局同じところに戻って来てしまう。

しかも辺りも既に暗い。

これ以上むやみに歩いたら流石にまずい、足元が見えず崖から落ちるかもしれない。

「ちきしょー！！！」

今まで叫べなかった分も含めて大声で叫んだ。

声は空しく木霊してやがて消え……なかった。

「くぅん・・・」

どこからか弱々しい声が聞こえた。

それは人の声ではなく明らかに動物の鳴き声だ。

「くぅん、くぅん・・・」

また聞こえた。

今度はハッキリと、すぐ隣の茂みから聞こえた。

俺は一瞬ビクツとしたが、弱々しく助けを求めているような鳴き声に恐る恐るだが茂みを覗いた。

そこには――ぐったりと顔を伏せた、とても綺麗な金色の毛皮をもつ狐が倒れていた。

04 金狐と足の怪我

しばらくの間、俺は狐に見惚れていた。

暗い山の中でも綺麗に輝く黄金の毛皮は毎日手入れをしているかのよう滑らかそうだった。

まだ幼く小さな体と体よりもずっと大きなぶつとい尻尾は風が吹くたびにふさふさと揺れる。

・・・モフモフしたい。

「・・・くおん」

「・・・はっ」

そんな俺の思いが通じてしまった（というか感じ取った）のか怯えるように一度鳴いた。

その鳴き声に俺は妄想世界から現実に戻ってくる。

いかんいかん、たつぷり20秒も見惚れてしまった、なさけねえ。

今度は見惚れるわけではなく、狐をじつくりと観察する・・・が、

（うわぁ、綺麗な毛皮・・・初めて狐見たけど想像してたよりずっと綺麗だな・・・）。しかしちっこいな、まだ子供かな？にしては尻尾がバカデカイ。てかモフモフしてえ。あの尻尾にダイブして思う存分モフモフしてえ・・・）

やはり思考は尻尾へと向かってしまう、なさけねえ。

そしてじつくりと観察していて、あることに気が付いた。

狐の後ろ脚辺り、尻尾に隠れて見えづらいが金色の毛が一部赤く染まっていた。

俺はそれをみてすぐに気付く。

——こいつ、もしかして怪我してるんじゃないのか？

だから動けず、こんなにぐったりしているんじゃない？

あの弱々しい鳴き声は本当に助けを求めているんじゃない？

「・・・お前、助けてほしいのか？」

「くゥん・・・」

俺は馬鹿正直に狐に聞いた。

はたから見れば変かもしれないが、狐はちゃんと返事をしてくれた。
狐の言葉は分からないが、俺には『助けて』そう言ったように思えた。

いや、そう言ったんだ。

俺はすぐに狐を抱き上げた、

抵抗することも無く、大人しいので助かる。

いや・・・もう抵抗する元気さえないのかもしれない。

狐を強く抱きしめ、山の中を走りだした。

一刻も早く家に戻ってこいつの手当てをするために。

05 9本の尻尾

俺は山を急いで下った。

またさっきのように同じ場所をぐるぐる回るかもと心配したがその必要はなかった。

先程迷いに迷ったのが嘘のように十分も経たないうちに山を出れた。

ここまで来ればこっちのものだ。

こんな小さな町の事なら隅から隅まで知り尽くしている。

近道よりもさらに近道（具体的に言えば人ん家の庭とか、すでに道じゃねえ）を通してあつという間に自宅へ（言ってなかったけどアパート住み）。

だれにも見つからずここまで来れたのはラッキーとしか言い様がない。

兎に角俺は自分の部屋に入ってドアの鍵をかけた。

狐を抱いているところを誰かに見られたら何と言われるか。

それ以前にこのアパート、ペット禁止だ。

「きゅ、くゅん・・・」

「い、ごめんな。苦しかったか」

狐が苦しそうに呻いたので腕の力を緩めた。

玄関からリビングに移動してそこにあるソファに寝かせることにした。

「・・・少し暗いな」

実際は少しどころかかなり暗い。

既に時刻は遅くて外も暗く、部屋の明かりも点けていないからだ。

カーテンも閉まっている為、外にある明かりは入って来ない。

ここが自分の部屋だから壁にもぶつからずにリビングまで来れたが1mから先は全く見えない程の暗さだ。

（明かり、明かり・・・スイッチどこだっけ）

手探りでライトを点けるスイッチを探す。

スイッチはすぐに見つかり、ライトを点ける。

部屋に明かりが戻り、狐の居るソファの方を見た。

勿論、狐は逃げたりせずにソファで寝ている。

いつ見ても小さな体といつ見ても綺麗な毛皮だ。

そして体よりもずっと大きなモフモフした尻尾。

あの尻尾をモフモフするのが俺の願いで・・・え？

・・・何か変なものが見えた。

俺は目をパチクリさせたあと、目頭を押さえて呟く。

「ああ・・・疲れてるんだな俺・・・。いや、幾らなんでも幻覚まで見えるとはな・・・なさけねえ」

目をゴシゴシとこすってもう一度狐を見て・・・再び目をパチクリ。

再び目をこすって何度か同じことを繰り返して思った。

ああ、俺はもう駄目だ。

幾らなんでも——『尻尾が9本に見える』なんてありえない。

・・・あ、そうかこれは夢なんだ夢なんだって夢なんだよ。

そう自分に思い込ませて頬を思いつきりつねったが、

「痛て・・・あれー？」

現実逃避を今すぐにでも行いたいところだが・・・どうやら夢ではないようだ。

じゃあ、目の前の生き物をどう説明するんだ？

小さな体から尻尾が9本も生えている。

今まで大きな尻尾と思っていたが、どうやら違っていたようだ。

山の中は暗かったのだからちゃんと尻尾の事を確認できず、町では家に戻るのに必死だったので気付かなかった。

しかし尻尾が9本も生えた狐・・・。

ああ、聞いたことあるぞ。

昔、日本や中国などで悪事を働いたっていう化け狐。

実際居るとは思わなかったし思えなかったが・・・こいつは確かにあの妖怪。

「・・・九尾だ」

05 9本の尻尾（後書き）

話の展開が長引いてしまう・・・。

06 手当

しばらくの間、俺は九尾のことをジーンツと見つめていた。

その外見だけ見れば混乱している様子も無く、冷静に九尾のことを観察しているように見える。

でも実際は頭の中はグチャグチャになるほど混乱している。

（え、何？九尾？妖怪？何でそんなのが本当に居るの？いやいや、冷静になれ俺。まずはこんな場所に妖怪なんか居るのか・・・あ）

俺はそこまで考えて電撃が走り頭を上げる。

思いだした。

キノコ狩りに出かけたあの山には『迷い山』と同じくもう一つの呼び名があったことを。

その呼び名とは『妖怪山』・・・その名の通り妖怪が出ると噂されているのだ。

山に迷い込んだ者に襲いかかり、その肉を貪り喰うという恐ろしい噂が。

しかしその噂を誰も信じていなかった、あくまで噂だ。

だって今時、妖怪なんてありえないじゃん。

しかし目の前にはその妖怪がしっかりと存在している。

「・・・くゥん？」

ビクッ！と突然の鳴き声に大げさに反応してしまう。

見れば混乱の原因である九尾がこちらを不思議そうに眺めてるじゃないか。

今まで見れなかった黒い大きなクリクリとした瞳が俺にジッとした視線を送ってくる。

愛らしい姿だが尻から生えた9本の尾があまりにも不気味すぎる。

思わず後ずさってしまい足元にあったティッシュ箱を踏みつぶす。

クシャッという音が聞こえて少しの沈黙が訪れた。

「・・・」

大丈夫、かな？

近づいても何もされないよね、危険はないよね？

あまりにも気持ち下がりが気味な俺、なさけねえ。

しかし相手は九尾だ、妖怪だぞ。

いくら小さいとは言っても油断したら一瞬でパクリと喰われるかもしれない。

だが連れてきたからにはしっかりと手当てをしてあげなくては。

取り敢えず、タンスから適当に消毒液や包帯を取り出す。

そして恐る恐るだが九尾に近づく。

消毒液片手に妖怪に近づく姿、自分でも笑いたくなるぐらいシュールな光景だ。

九尾は逃げることも襲いかかることもせず、ただずっと俺を見つめている。

俺はそっと九尾の傍にしゃがんで足に手を添えて怪我を診た。

（思ってたよりも、酷いな・・・）

傷は想像以上に深くえぐれていた。

山で診たときよりも血が広がって赤い大きな模様ができていた。

罨に引っ掛かったのか、はたまた誰かに撃たれたのか、どうしてこ

んな怪我をしたのかは分からない。

しかし今はそんなことを考えるよりも傷の手当てが先だ。

九尾の足を少し強引に引っ張って消毒をする。

傷に染みたのか『きゅっ!』と驚いて少し暴れたがすぐに大人しくなる。

ある程度の消毒をしてすぐに包帯を巻く。

慣れない手つきでかなりぎこちなかったが何とか何重にも巻いた。

(・・・てか、人間用の消毒液で大丈夫なのかな? もうやっちゃったから考えても遅いけど)

「よし、できた」

最後に包帯を簡単には解けないようにしっかりと結ぶ。

これではばらくは大丈夫だろう。

激しくは動けないだろうが、傷は酷くならない筈だ。

不思議そうに自分の足を眺める九尾が可愛く見えた。

妖怪だからって片っぱしから人間を襲うって訳ではないようだ、寧

ろこつちが襲いたいぐらい可愛い。

「これでしばらくは大丈夫ふあああ・・・眠っ」

突然の眠気につい大きな欠伸をする。

・・・そう言えばもう寝てる時間だった。

山で迷った時の疲れが一気に出てきた。

もう寝てしまいたい気分だが九尾を放置していても大丈夫だろうか？

しかしその心配も無用のようでいつの間にかスウスウと音をたててグッスリ寝ていた。

「・・・俺も寝よ」

眠気も限界を超えて目が充血して来そうだ。

重い足を引きずって寝室に入り、倒れるようにベッドにin。

（・・・何だったんだ、今日は）

色々とあり過ぎた。

キノコ狩りから始まり、山で迷い、怪我した九尾を見つけた。

今々考えたらどこがどうなったらこうなるのか疑問に思う。

てかキノコを渡し損ねた、報酬金貰ってないじゃん。

まあ、良いか。

明日渡せば良いだろうし。

重い瞼が徐々に閉じていき、いつの間にかぐっすりと眠った。

07 闇の向こうの金色の髪

——足音が聞こえる。

誰も居ない筈の廊下から、確かに人が歩く音が聞こえる。

ギシギシと床がきしむ。

その足音は、恐らくリビングからだ。

小さな音でも静寂に包まれた闇の中では、ハッキリと聞こえる。

強盗が来た、とか。

幽霊が出た、などとは思わなかった。

その足音はとても柔らかく、聞いているうちに不思議と心が安らぐからだ。

足音は徐々に俺の眠っている寝室へと近づき、止まった。

音の主は確実に部屋の扉の前に居る。

うつすらと瞼をあけ、扉を見つめた。

ゆっくりと、ドアノブが回るのを見た。

——扉の向こうに、金色に輝く髪の毛が見えた。

暗闇の中でも輝く、さらりとしたそれは小さく波打っていた。

金色の髪の毛は、少し姿を見せただけで闇に溶け込むように消えた。

俺は扉の向こうの闇をジッと見つめるが、何も見えない。

何も見えない闇の中から、一匹の狐が出てきた。

9本の尾を持つその狐は、リビングで寝ているはずの九尾だ。

トコトコと歩いてきた九尾は、俺の横たわるベッドに近づくと配管工よろしく飛び移った。

ポフッとベッドは少しだけ沈んだがすぐに元に戻る。

ベッドに乗りこんだ九尾は布団に足を取られぎこちなく俺の隣まで来ると、再び眠り始めた。

九尾は俺のことを信用してくれたのか、一切の警戒をせずにぐっすりと眠っている。

俺はそっと九尾を撫でようとして、止めた。

幾つかの疑問が浮かんだからだ。

・・・どうやってドアを開けた？

九尾の手ではドアノブを回すことはまず不可能だ、それ以前に身長が足りない。

そして・・・先程、暗闇の中に見えた金髪は何だったのだろう。

先程はまるで気にしていなかったが、考えてみれば普通におかしい。

玄関は鍵がかかっていて入れない筈だ。

足音はリビングから聞こえてきたが、俺の部屋はアパートの3階に位置する。

窓から侵入するのは難しい。

なら・・・どうやって入ってきた？

しかし疑問を解決させることはできなかった。

疑問解決を邪魔するかのように強烈な睡魔に襲われたからだ。

抵抗することも空しく、すぐに眠りに落ちてしまった。

08 枕か九尾か・・・女の子？

ピピッピピッピピ。

ウザったらしいアラーム音が部屋に響く。

顔をしかめて枕に頭を埋めて耳をふさぐがケータイのアラーム機能は止まらない。

手を伸ばしてアラームを止めようとしたが、俺とケータイの間にはさまった抱き枕が邪魔で手が届かない。

むむっ、とうなって枕をどけようとするがどういうわけか枕とは思えないぐらい重い。

俺は眉をひそめて手に力をこめるが少し位置がずれただけでやっぱり邪魔だ。

んー、体勢が悪いから力が入らないのか？

枕に本来の使用方法的通りに抱きつき、体ごと動かそうとした（そこまでするなら素直に起きたらいいと思った君。そこはノータッチだ）。

しかし、抱き枕の予想以上に柔らかさに思わずドキッとして力が抜けた。

それに人肌のように温かく、その柔らかさはまるで女性の胸のよう（実際に触ったことはないけど恐らくそれぐらい、てか触れる筈な

いじゃん・・・だ。

「ああ、この感触・・・気持ち良い・・・」

気付かないうちに変態じみたことを呟いていた。

決してそこまで欲求不満なんじゃない！と弁解したいが自信がない。

そして無意識に抱き枕を揉み始め・・・ん？

「ん・・・」

女性特有の甲高く、あえぐような声が聞こえた。

・・・いや、きつと空耳だ。

ムニムニとした触り心地を再び感じるために（決して変態じゃないからな！）手を動かす。

「んあ・・・んー・・・」

また聞こえた。

認めよう、どうも空耳じゃないようだ。

じゃあ、今の声は何だ？

俺が抱き枕を揉むと同時に聞こえたような気が・・・あれ？

「・・・はっ!？」

俺はベッドから素早く飛び起き、ササッと部屋の隅に移動してから状況を整理する。

まず最初に――俺は抱き枕なんか持っていない。

買ったこともないし貰ったこともない、だからここに抱き枕はない筈だ。

では、これは何だ？

一番に思いついたのは、昨日の夜中に俺のベッドに不法侵入した例の九尾だ。

でもベッドに横たわる謎の物体は俺の背丈ほどの大きさ、とてもあの小っこい九尾とは思えない。

しかし・・・アイツは九尾、妖怪だ。

妖術か何かで大きさぐらい簡単に変えられるだろう、今変わる理由は分からないけど。

それにほら見ろ、いつの間にか布団をかぶって体が見えないがやけに長い金色の毛とピクピク動いている耳が見えてるぞ。

俺は恐る恐るだが布団に手をかけ、引っぺがそうとする。

何だか体が見えないのが不安でもあるし、ここにずっと寝られていては困るからだ。

そして、俺はすぐに自分の行動に後悔することに（実は少し幸せな気分だったのは内緒）なった。

ベッドには九尾なんか居なかった。

九尾ではなく——めちゃくちゃ可愛い女の子が眠っていた。

・・・何故か、裸で。

08 枕か九尾か・・・女の子？（後書き）

未だに学園っぱさが出てこない悲しい現実。

09 眠れる彼女は九尾の子？

俺は全く動く事ができずに突っ立っている。

まばたきするのも呼吸をするのも忘れて、ただベッドに横たわる女の子を凝視していた。

まず最初に目についた長くて綺麗な金髪・・・から生えた狐のような耳だった。

本来、絶対にあってはならないところに大きな耳が生えていた。

その髪と同じ金色で耳元が見えないぐらい調和している。

そしてそれがただのコスプレ道具でないことはすぐに気付いた。

何故なら皮の薄い所から細い血管が見えるし、時々ピクピクと動くからだ。

俺はもしかや、と思った。

次に目についたのは尻尾だ。

モフモフとした大きな尻尾が、腰より少し低いぐらいのところから9本も生えている。

やっぱり・・・、と心の中で小さく呟く。

この女の子は九尾だ。

何がどうなってこんな姿になっているのかは分からないが、確かに俺のベッドに侵入してきたあの九尾だ。

スゥスゥと可愛らしい寝息が聞こえる。

寝息をたてている彼女の顔を見た。

とても可愛い表情を浮かべた、人間の女性の顔だ。

しかし人間の女性以上に可愛くて美しい顔だ。

今度は彼女を体へと視線を移す。

滑らかな曲線を描く身体が露わになっている。

そしてたわわに実ったその胸が見え・・・ああ！

俺は無意識のうちに一瞬で手に掴んでいた布団をかぶせた。

俺の中の理性がそうさせた、後悔はしていない。

もし少しでも行動が遅れて見てはいけないものが見えてイケない感情が爆発したことだろう。

「んむー・・・何・・・？」

「・・・」

やっちまった。

俺の感情は爆発することはなかったが、代わりに彼女を起こしてしまった。

彼女は体を起こして状況を確認しようとする。

勿論、体を起こせばかぶせてあった布団はずり落ちて再び裸体が露わになってしまう。

それは不味い、今度こそイケない感情が爆発してしまう。

「ちょっと待て！今起きたら色々和不味いから！だからまだ起きんな！」

「えー、何でー・・・？あれ・・・何で私、裸なんだろう」

「こっちが聞きてえよ！とにかく動くな良いな分かったな！」

俺は素早い動作で部屋から出て10秒も経たない間に戻ってくる。

手には何のプリントもされていないシンプルなシャツと男物の新品のパンツ。

それをまとめてベッドに放り投げる。

「それを着ろ、そして何も言わずにこっちに来い。文句は言うなよ。女物のパンツなんて持つてゐるわけねえからな！」

「んー、分かったけど・・・このシャツ、胸のところが苦しそう」

「それはお前の胸がでか過ぎ・・・いや、何でもない。とにかく、ちゃんと着てから出てくるんだぞ」

はーい、という軽い返事に頭が痛くなる。

もぞもぞ動く布団を眺めてふと思う。

・・・どうしてこうなった。

10 九尾の名前は・・・

「・・・で、誰だお前」

俺は未だにもぞもぞと動き続ける布団に向かって声をかける。

服を着るのに（十中八九シャツだろうが）苦戦しているのか、時々うめき声が聞こえる。

うめき声は聞こえるのに肝心の返事は帰って来ない。

「・・・聞いてんのか？」

「え、なに・・・きゃ！」

無茶な姿勢から振り向こうとしたのか、彼女は布団に包まれながらベッドから転がり落ちる。

必死に出ようとしているのか、ばたばたと暴れだすが出て来れない。

やっこの思いで出てきたのは耳の生えた頭上だけだ。

あまりにも間抜けなその姿を見て俺はポツリと呟く。

「・・・おバカキャラ？」

「おバカって言うなー！」

喚きながら這いつくばる様に布団から出て来やがった。

しかしお尻から生えた尻尾がまだ布団と絡まっていることに気付き、尻尾を引っ張ったが布団が固定されてるわけもなく尻尾に布団を絡めたまま尻餅をつく。

激しくピクピクと動く耳は憤りの表れなのか。

とにかく言えることは、こいつは正真正銘のバカだ。

産まれてからずっとバカバカと言われた奴でもこいつには敵うまい。

取り敢えず俺は最初に問い掛けたことを再び聞く。

「だから、お前は誰だよって」

「え、私？ 私は『玉藻たまもの 玖美きゅうび』。宜しくね」

「そうか、俺は徳野秀輝だ。宜しく・・・いやいや、名前じゃなくてだな」

「秀輝・・・秀輝、うん分かったよ秀輝。それで早速で悪いんだけどお腹が減ってきて――」

「だから話を聞け――!!」

思わず感情の赴くままに叫んでしまった。

しかし玖尾に驚いた様子はなく、むしろ話を遮られたことについて不満を言いたそうだ。

いやいや、文句が言いてえのは俺の方だよ？

「俺が言いたいのはだな、お前が俺の連れてきた九尾なのかどうなのか。それについてはどうなんだ？」

「あ、うん。そーだよ。証拠にほら」

「・・・うん、まあ、ああ。確かに九尾で間違いなさそう」

玖尾が見せたのは自分の右足のふくらはぎ辺りだ。

そこには俺の巻いた包帯が確かにあった。

血が少し滲んで来ているあたり、そろそろ取り替えなきゃなー、なんて思っていたり。

「うん・・・それともう一つ聞きたい事があるけど、お前はマジで九尾で妖怪なのか？」

「それについても間違いなくそうだよ。この尻尾と耳を見たらすぐ分かると思うんだけど？あと玖尾って名前で呼んでよね？」

そう言いながら玖尾は自分の尻尾をゆっくりと振り廻し、大きな耳を指でなぞっている。

玖尾の言うとおり、尻尾を見ただけでもう妖怪としか思えなかったのは確かだ。

それでもやっぱちゃんと確認しなきゃ信じがたいこともある。

「それでね、私は助けてもらったことに対する感謝の気持ちとしばらくお世話になるから宜しくって気持ちを伝えるにここに来たんだけど・・・もうグッスリ寝てたから起こすのも悪いかなって思ってた私、寝ることにしたんだけどね。朝起きたら気付かない間に人間に化けてるし秀輝が驚きのあまり石化しそうだったしで私の心境は大変だったんだよー？」

「・・・さいですか」

何で俺のベッドに来て寝てたのか聞きたかったが、玖尾があっさりと喋っていた。

しかしこの九尾、やけにお喋りだ。

おバカキャラに加えて、お喋りキャラなのか？

妖怪ってのはこんなにもお喋りなもんなのか？

それも含めて、聞きたいことは色々があるが、

「まあ、玖尾には色々聞きたい事が山ほどあるわけだが・・・どうやらもう時間がないようだ」

それを聞いた玖尾は首をかしげた。

「どうして？」

「・・・そろそろ行かなきゃマジで遅刻する」

俺はゆっくりと視線を時計へと移す。

今日は月曜日だ。

・
・
・そろそろ校門が閉まる時間になる。

10 九尾の名前は・・・(後書き)

キーボード復活キター(◡ ◡)ー!!!

11 九尾の浮かべた邪悪な笑み

「遅刻するって・・・何に？」

「学校だよ、学校。くそ、朝飯食う時間がなかった・・・」

俺は突っぱねるように玖美の質問に答えた。

正直、こいつが現れたおかげで頭の中は混乱状態だ。

九尾だの妖怪だの言われてもこっちは困るだけでどうしようもない。

それに学校に遅刻しそうなのも朝飯を食べ損ねたのもこいつの所為と言えはその通りである。

だが玖美は俺の敵意満々の声に怯えることも無く、寧ろ目をキラキラ輝かせて再び質問をする。

「もしかして学校って人間の大人たちが子供たちに自分たちの持っている知識を教えるって言うあの学校？ そうなの？ そうなんだよね！？」

「ああ、確かにそうだけどなんでそんな興味津々なん・・・はっ！？ お前まさかついてくるつもりじゃないだろうな！ 駄目駄目駄目駄目！ お前は存在自体怪しいのにもし九尾だってばれたらどうする気

だ!？」

「大丈夫だよー。私だって妖怪のはしくれ、自分の耳としっぽぐらい簡単に隠せるんだから。ちよつとメンドウだけど人間にだってなれるんだからねっ」

「それなら大丈夫・・・じゃねーよ!いきなり生徒でもない奴が現れたらそれこそマズイわ!運が悪けりゃ警察のお世話になるんじゃないかね?」

とにかく駄目だ、と駄目押しをしたが玖美は絶対に諦めていない。

口では『えー嫌だ行きたいのにー』とあたかも行つては駄目と分かったフリをしているが、その目は謎の闘志にギラギラと光り口元は不気味な笑みを浮かべている。

こいつ、油断ならねえ・・・!

完全にその闘志を消してやりたかったがもう無駄口を叩く時間さえない。

数秒で着ているTシャツとズボンから制服に着替える。

机に置いてあるスクールバックに教科書や筆記用具を適当に放り込み、玄関へ急ぐ。

「とにかくだ、絶対にこの家から出るなよ。学校に来るのは言語道断。頼むから大人しくしてろよ」

「えっ、それじゃあ私のご飯は？おやつは？私はどうやって生きればいいのか!?」

「うるさい贅沢言うな。くそっ、居候モドキの癖に・・・食い物は冷蔵庫から適当に食べて良いから」

それだけ言うと俺は返事も聞かずに玄関から飛び出す。

あ、ちよつと！と俺を呼びとめる声が聞こえたがこれ以上は無視だ。

・・・チラッと見えた玖美の顔に浮かんだ邪悪な笑みは気の所為であることを願う。

俺は町を全力で駆け抜ける。

このペースなら校門が閉まるまでには間に合いそうだ。

12 学校の怪物

「うおおおおお!!」

今、俺は商店街の道路を雄叫びを上げながら全力で駆け抜けています。

道行くおばさん軍団が驚きでギャーギャー騒いだあと、白い目で見られたが気にしている余裕はない。

そして自分でも驚くほどのスピードで走る。

それほど長くない筈の道のりがとても長く感じるのは何故だろう。

しかし、そんな全力マラソンも終わりを迎える。

「見えた・・・ッ！」

100m程度の一直線の道路の先、校門と言う名のゴールが姿を現した。

もう少しで辿り着く。

だがタイムリミットは残りわずか。

さらに校門のわきには、遅刻した者に死より恐ろしい罰を与えると

言われるゴリラ体育教師、スクール・ザ・モンスターこと大山先生おおやまが居た。

奴がこの学校に降臨して以来、教師に反抗する者はおらず、遅刻した者は一人も居ないと言われている。

噂では、偶然出くわした武装した銀行強盗グループを一人で壊滅させたという。

そして――奴がいると言うことは俺の命が危ない。

「ッ！？おおおおお！！」

身体に残る全ての力をフルに使ってさらに加速する。

今の俺なら100m走で世界新記録だって出せそうだ、ボ○トなんぞ目じゃないだろう。

ヒィヒィ言いながら全力で走って、最後は頭から校門に飛び込んだ。

ズザッ！！と轟音を立てて地面を転がりまわる。

「・・・0.74秒」

しかし呟くように吐かれた言葉にガバッ！！と立ち上がり振り返った。

本家顔負けの仁王立ちをかましている大山の手にはあまりにも小さな（大山が大き過ぎる為小さく見える）ストップウォッチが。

「徳野、0・74秒遅刻だぞ・・・どういことだ」

駄目押しするように言われた言葉に俺は汗を滝のように流して真っ青になる。

大山のこめかみには青筋がビビキィ！！と立っている。

その迫力はどんな怪物だって逃げ出すレベルだ。

神様、何故俺を見捨てたのです。

俺は悪魔に連れて行かれてしまいます。^{大山}

さようなら人生、さようなら皆、玖美も家に閉じ込めたまま勝手に出てきてごめんな。

しかし、死を覚悟した俺にまさに神のような一言が聞こえた。

「・・・まあ、何だ。たった0・74秒ぐらい許してやろう。とつとと行け、授業に間に合わなかったら承知しないぞ」

神よ、俺を見捨てなくてありがとう。

大山に遅刻したことに対する謝罪をして逃げ出す様に生徒玄関に入る。

もう二度とこんな目に遭わないよう気を付けようと心に刻む。

何はともあれ、間に合った。

靴を履き替え、駆け足でクラスへ向かう。

俺のクラスは2階にある1ー7だ。

階段からも近くて助かる。

これなら授業には十分間に合うだろう。

13 幼馴染のクラスメイト

「・・・うだー」

一時間目の授業には何とか間に合った。

しかし授業は受けなかった。

授業中、ずっと机に突っ伏して寝てたからだ。

担任に教科書で頭を叩かれても眠り続けた俺はある意味勇者だろう。

いや、だってしょうがないだろ？

ただでさえバイトで疲れてるのに今日の朝は休む暇がなかったじゃねえか。

因みに今は三、四時間目の間にある休み時間、勿論今も寝ているつもりだ。

しかし俺の安息の時間を妨害する者が居る。

「シュウちゃん、大丈夫？ 具合、悪いの・・・？」

俺の肩をゆすりながら声をかけてくる茶髪の女生徒が一名。

彼女の特徴といえば、頭のとっぺんから生えた見事なアホ毛だろう、これほど見事なアホ毛は滅多に見れないと思う。

彼女の名前は『空野 そらの 涼香 すずか』。

俺の実家のお隣さんであり、幼馴染であるクラスメイト。

さらに言えば副町長の娘さん、いわば令嬢である。

「んあー・・・？ダイジョーブダイジョーブ、ちょっとふらつく程度だからな・・・」

「それ大丈夫じゃないよね、結構危ないよね！？ちゃんと休んだ方が良いよ！」

そして何故か涼香は毎日のように俺の傍に寄ってくる。

通学中は偶然出会えば走ってくる、何故かほぼ毎日出会うが。

休み時間中は俺がどこに行こうとついてくる、トイレに行こうと入口で待ってるし。

昼食の時は必ず俺の隣で食べる、何故か弁当は必ず二つ持っていて俺が弁当を作り忘れた日には片方を渡してくれる。

とにかく涼香はそんな奴だ、まるで道端のガムみたいにくっついてくる。

「だから、大丈夫だって・・・昼まで寝てりやすぐ治るだろ。ささっ、そろそろ授業始まんぞ」

授業のことを言うと涼香は渋々と自分の机に戻って行く。

案の定、それから十秒も経たぬうちにチャイムが鳴って担任が教師に入ってくる。

うむ、寝る準備は既に万端。

俺は目を閉じ、机に突っ伏す。

授業が始まり、担任の眠気を誘う声が耳に入る。

涼しいそよ風と程良く差し込む日光が眠気をさらに強め、俺はいつの間にか眠ってしまった。

13 幼馴染のクラスメイト（後書き）

明日から学校が始まるでござる。

14 嫉妬と敵意と憧れの的

「・・・ちゃん。・・・シュウちゃん！起きてもうお昼だよ！」

俺を呼ぶ声が聞こえ、誰かが肩をゆすっているのに気付いた。

どうやら俺の安息の時間は終わってしまったようだ。

重い瞼をゆっくりと開く。

ちよつとした日差しでさえ、寝起きの俺には眩しい。

「・・・あー、もう昼か」

俺は眩きながら肩をゆすっていた誰かをチラッと見る。

案の定、涼香だった。

「涼香か・・・なんか用でもあんのか？」

「あ、その・・・シュウちゃん、今日すごい急いで教室に入ってきたから・・・もしかしたらお弁当つくってないんじゃないかなーって・・・？」

「・・・何故分かった」

涼香の洞察力は凄まじい、いつも驚かされる。

こいつは案外、探偵に向いてるかもしれないな。

とにかく、涼香の言うとおり今日は弁当をつくっていない。

というかつくれなかった。

全てはあの九尾が原因である。

「そ、そうだよね！私、シュウちゃんの分のお弁当も持ってきてるから食べ・・・あれ？」

涼香が自分のバックから二つの弁当を出してるうちにダダダッ！
！と教室から逃げ出す。

涼香のつくる弁当は確かに美味しい、おかずのレパートリーもかなり広い。

だが欠点が一つだけあるんだ・・・ご飯の上に必ずデカデカとハートマークが書かれている、はたから見れば愛妻弁当に見えなくもない。

おかげで弁当の中身を見た奴らはウザったい口笛を吹いてバカにして来るし、今にも呪い殺して来そうなぐらいの殺気をこめた目ではらんでくる奴まで居やがる。

「ああ・・・今日はパンか」

教室から十分離れた俺は誰にも聞こえないように呟いて、購買に向かう。

しかしパンはもうほとんど残ってないだろう。

どこの学校でも購買でのパン争奪戦は激しいもんだと思う。

「あるとしてもせいぜいコッペパンだろうな、らららコッペパンららコッペパン・・・っと」

ぼやきながら歩いていたら廊下で誰かにぶつかった。

顔は見えなかったが制服からして男子生徒だ。

「悪い、前見てなかった・・・」

俺は謝りながら相手を見て、ゲツと声がもれる。

男子にしては長い黒髪とシミ一つない黒の制服。

そして獲物を狙う鷹のように鋭い視線に思わず顔をしかめてしまう。

こいつの名前は『天月あまつぎ 鴉鷹あおとう』……だったと思う。

1年生にして校内トップの学力を持ち、スポーツにおいても天月の右に出る者は居ない。

さらにかんりの美貌の持ち主で、学年を問わず女子にモテモテ、女子にとって憧れの的であり男子にとっては嫉妬と敵意の的である。

さらにさらに嫌な奴でもある、一部の女子はそれがクールでかっこいいというらしいがどこがクールなのか全く分からない。

そんな奴が目の前に居て、さらにぶつかってしまったと来たわけだ。

女なら歓声をあげているかもだが、男なら誰だって顔をしかめるだろう。

しかし、

「……この匂いは」

天月は俺に文句を言うことはなく、あろうことか俺の首元に鼻を当てて匂いを嗅ぎ始めた。

あまりにもいきなりのことと俺は全く動けなかった。

俺だけではなく、回りを歩いていた生徒は皆足を止めて俺と天月を交互に見ている。

そしてある考えが頭をよぎる。

天月の今の体勢・・・周りから見たら俺の首に”キス”をしているように見えるのかも。

「なな・・・何しやがるッ!!」

俺は天月を突き飛ばそうと腕を振りまわしたが音も立てずに後ろに下がりあっさりとかわされる。

顔を真っ赤にして天月をにらみつけたが、全く動じることはなく何かを考える仕草を見せる。

何度か一人で呟いた後に顔をあげて言った。

「すまない。失礼する」

それだけ言うと天月は歩く向きを変えて早足で去っていった。

姿が見えなくなっても俺はしばらく動かなかったが、二十秒程経ってから俺は呟いた。

「何だったんだよ・・・いきなり・・・」

その後もしばらくブツブツ文句を言ってから再び購買へと向かった。

俺が去ったあと、廊下から女子の悲鳴と悲鳴に交じって歓声が聞こえたが何も聞かなかったことにした。

14 嫉妬と敵意と憧れの的（後書き）

タイトルって考えるの難しいね（・ω・）

15 モンスタートレイン新一

俺は購買でパンを3個と牛乳1本、無くなりかけてたシャー芯を買って教室に戻ろうとしていた。

ラッキーなことにあまりまくったコップパンの下に隠れるように混じっていた焼きそばパンを見つけたのでありがたく頂くことにした（少し潰れていたが許容範囲）。

早速喉が渴いてきたので買った牛乳にストローを刺しながら俺はあることを思い出していた。

天月の言った”匂い”とやらがどうしても忘れられない。

ストローを刺した牛乳をチューチュー飲む。

制服を洗う時に使った洗剤が天月が特別^{ひいき}鼻^び肩^{かた}している洗剤で大好きな匂いだった・・・は流石にありえねーか。

例えば洗剤説が合ってるとしても（ありえないが）天月はそんなことでは首の匂いを嗅ぐような変態じゃないし、天月じゃなくてもそんなことをする変態はそうそういない。

じゃあ、なんだろうか。

この”匂い”とやらが天月にとっては余程重要なことだったのだろうが、何のことかは見当もつかない。

「訳分かんねー・・・」

どれだけ考えても接点が見つからない。

このことについては今度天月に会った時に聞くことにしよう。

俺は飲み終わった牛乳の紙パックを右手で握りつぶしてゴミ箱に捨てる（勿論洗ってもない、明日この辺臭いだろうな・・・）。

丁度良い感じに牛乳を飲み終わる頃には教室の前に辿り着いた。

開けっ放しにされたドアから教室に入って自分の席に座ってパンを食べ始める。

とは言ってもたった3個のパンじゃすぐに食べ終わってしまう。

喉も渴いたが牛乳はさっき飲みほした。

「はあ・・・」

溜息を一つ吐いてから立ち上がって再び教室の外に出る。

手洗い場で水を飲むためだ。

「おっ、秀輝じゃねーか。どこ行くんのだ？」

「水飲みに」

今、俺に声をかけたのは体のデカイむさ苦しい男は『水谷 みずたに 新一 しんいち』。

俺の悪友であり親友、以上。

手洗い場は階段の踊り場にあつて、階段は教室を出て右に曲がればすぐそこにあるので10秒もかからずについた。

水を飲んで汗とパンくずで汚れた手を洗って教室に戻った。

そして戻ったらすぐに新一がタツクルをかましてきそうな勢いでズダダダッ！！と近づいてきた。

新一はアメフト部ってだけあって、まるで牛の猛突進を見ているようだった。

とは言ってもそのままぶつかわるわけもなく、手前で急ブレーキをかけて止まった。

何事か聞こうと口を開く前に新一が言う。

「ニュースニュース大ニュースだ秀輝！なんかめちゃくちゃ可愛い女の子が学校に来たらしいぞ！！・・・なにが目的かは知んねーけど」

「はいい?」

「だ・か・ら!めっちゃ可愛い女の子が来たんだって!!しかも金髪巨乳だってよ!!クッこうしちゃいられね・・・!とつとと見に行くぞ、玄関に居るってよ!!」

「ま、待て新一・・・なんでそんなにテンション上がってんのか分からねーし、それってそこまで大ニュースでもないんじゃないわー!!」

俺は新一に手首を掴まれ、物凄い力で引っ張られていった。

幾ら女に飢えてるからってこりゃないぜ。

そして流石アメフト部期待の新人・・・バカみてーに力が強え・・・!!

え、俺は何部かだって?帰宅部だよ、言わせんな恥ずかしい。

手を振りほどこいてすぐにでも離れたかったがこいつの馬鹿力の前には無力だし、それにその金髪巨乳の女の子ってのにも興味があったので抵抗はしなかった。

興味と言っても『金髪巨乳の女の子だって!?それは観察するしかないだろフーハアフーハア・・・』みたいな感じではなく、何故かその女の子ってのに妙な心当たりがあったからだ。

・・・嫌な予感しかしね！。

とにかく、見に行けば分かることだ。

新一という名の猛突怪物急行列車に引きずられながら玄関へと向かう。

15 モンスタートレイン新1（後書き）

テスト期間に入ったので更新遅れるかもです。そして行数はちゃんとした方が良いのかな・・・。

16 九尾の女の子の侵入者

俺と新一が玄関についたときには、すでに通勤ラッシュのときの満員電車のように人が集まっていた。

集まっているのが男ばかりなのは（新一いわく）金髪巨乳の女の子は男を引きよせる・・・らしい。

あながち間違っていないのかもしれない。

どこから持ってきたきやがったのか七人に一人ぐらいの割合でカメラを構えた男がちらほら。

悲しいかな、隣の新一の手にもカメラがセットされている。

俺が白い目で新一を見ていると、突然叫びだした。

「野郎どもー！セクシーショット撮影隊、今日こそベストショットを撮るぞー！！掛け声ーさんにーいちハイ！」

「谷間パンチラセクシーショット！おー！！」

「なに気持ち悪い掛け声あげてんだよー！！てか何でお前がリーダーポジなんだー！！今日こそってことはこんなくだらねーこと毎日やってんのか！？いやまずセクシーショット撮影隊ってなんなんだよー！！」

右手を突き上げて意気込む新一の頭をバシーン！！と思いつき叩いた。

不意を突かれた新一は力んだゴリラのような顔で右手を挙げたまま、仰向けにボタンと倒れた。

「隊長、隊長！しっかりしろ！隊長——！！！」

カメラを構えたまま整列している男どもから多くの声が上がるが、隊長と呼ばれた新一は口からよだれをたらすだけでピクリとも動かない。

返事がない、ただの屍のようだ。

新一は急いで駆け付けた隊員AとBに担がれ、保健室に連れて行かれた。

まだ隊長、隊長！！と叫ぶセクシーショット撮影隊をギロリと一睨みすると、蜘蛛の子を散らすように隊列を崩して逃げて行った。

「はあ・・・何がしたいんだか・・・」

溜息を一つ吐いて俺は玄関を見渡す。

セクシーショット（ry）が消えたおかげでギュウギュウ詰めだった玄関でも大分動きやすくなった。

人が少なくなつて人混みに隙間ができた。

俺は身をひねりながら人混みの中を進む。

がやがやとうるさい人混みだが前に進むにつれて生徒とは明らかに別の声が聞こえてきた。

「だから、君はどこから来たんだと聞いているんだ」

ゲッ、この声は大山。

小さくて騒ぎにまぎれて聞き取りづらいがドスのきいたその声は聞くだけで体が震えそうだ。

今日の朝叱られたばかりの俺にとっては大山と顔を合わせるのかなり気まずい。

だがどうやら文句を言うわけにはいかないようだ。

「人間の知り合いを探してたら良い匂いがしたから来ただけだって
……。お腹減って死にそうだからなにか食べ物くれたら嬉しい
かなあ……。？」

聞き覚えしかない声が聞こえる。

おまけにキラキラ輝く金髪もちらほら。

これはもう確定した、侵入者は玖美だ。

しかし・・・言ってることがめちゃくちゃだな。

大山も怒鳴りたいのはやまやまだろうが、学校の生徒でもない見ず知らずの人に怒鳴るのはためらっている。

もう俺は隙間を探そうとせず、前に居る奴を押してドンドン進んでいく。

文句を言われながらも俺は押し続けてやっと大山と玖美が見える位置までついた。

やっぱり侵入者は玖美だった、アイツには後でじっくりと説教させてもらうか。

ふと、玖美がハッと顔を上げ鼻を頻繁に嗅ぎ始めた。

「クンクン、この匂いは・・・秀輝？」

いや、お前は犬か。

そう突っ込みたかったが玖美は九尾、狐なのに鼻が利くのかもしれない。

「ククン・・・秀輝は・・・そこだね！」

玖美はさらにクンクンクンと匂いを嗅ぐのを止めてバツ!!とこちらを見た。

その瞬間、俺と玖美は目があった。

玖美の目は俺を見た瞬間、ギラギラ輝き始め『やっと見つけた!』と語っていた。

そしてとてつもないドヤ顔に俺は腹が立ったが次の瞬間、サアと一瞬で青ざめる。

大山がこちらに振り返った。

16 九尾の女の子の侵入者（後書き）

途中から文が色々とおかしいことに・・・。
言葉不足過ぎる自分。
r z。

17 バカとゴリラと救いの手

瞬間、反射的に後ろに振り返り逃げる体勢に入った。

しかし時すでに遅し。

「――徳野」

「・・・はい」

「ちょっとこっち来い」

「・・・・・・はい」

大山直々の指名が下ったため、俺は逃げることができず今にも倒れそうな顔でフラフラと前に出た。

目の前にできていた人混みはズザァ！！と横にずれ、少し狭いが十分に通れる道ができる。

道の真ん中をトボトボと歩きながら周りから聞こえる会話に耳を傾ける。

「おい、誰だアイツ・・・」

「さあ・・・？けど、終わったな・・・」

「アイツ・・・死ぬのか・・・？」

「誰だか知らないけど君のことは忘れないわ・・・」

ざわざわひそひそ。

聞かなければ良かったと後悔するがもう遅い。

一層絶望に満ちた表情を浮かべる俺は逃げ出したという気持ちを必死に抑えて大山の目の前に立つ。

しかし顔を合わせられない、めっちゃ気まずい。

隣にはアパートに居たときと全く同じ格好の（即ち男物のTシャツと男物の新品のパンツ）の玖美が立っている。

一体全体どうやったのか、大きな耳とモフモフした9本のしっぽは綺麗に無くなっている。

何も知らない人が見れば、ただの可愛い人間の女の子に見えるだろう。

しかしその格好はただの変態である。

めちゃくちゃ可愛い金髪巨乳の女の子という情報は正確に伝わっていたようだが変態じみた格好というのはしっかりと伝わらなかったようだ。

キラキラと目を輝かせる玖美はあまりにも場違いだ。

どんよりとした空気の中、大山が尋ねた。

「徳野、こいつはお前の知り合いか？」

「いいえ全く赤の他人で・・・すみません、そうです知り合いです」

知りませんと答えかけたが言葉を呑みこんで、正直に答える。

ここで嘘をついても何の得もない。

しかし、こんな変態じみた格好をした知り合いがいるなんて思われたくない。

少しの間をおいて大山は再び尋ねる。

「なんでお前の知り合いが学校に居るんだ？正直に答えろ」

「え、えーと・・・あの・・・」

分かるわけがない。

分かるわけがないことを言えるわけがない。

言葉に詰まってまともに返答できない。

ただ興味本位で来ただけなのだろうが、そんなこと正直に言っても納得してもらえないのは目に見えている。

俺は助けを求めて玖美をチラッと見る。

「ほー、ここが学校ってやつなのかー・・・。結構広そうだけどなんか落ちつかないかも・・・」

こんなやつに期待した俺が馬鹿だったよ。

なんだその感想は、落ちつかないのはお前のテンションの所為だ。

色々突っ込みたいのはやまやまだったが、今はそんな状況じゃないしそんな元気もとうに尽きた。

反対に玖美はきよろきよろと玄関の隅々まで眺めている。

今にも学校の中に飛んでいきそうなテンション、その元気はどこから湧いているのか。

「・・・早く言え。俺にも時間というものがあって忙しいんだ」

流石に大山も苛立ってきたのか、催促し始める。

しかしやはり俺は生返事しかできない。

大山の怒りのボルテージは少しずつ、しかし確実に溜まって行く。

どうすればいい、考えるんだ俺。

ふと、玖美が口を開いた。

「ねえ、秀輝。このゴリラみたいなおっさんはほっという学校の内してよ」

・・・バギイイツ！！

何かが碎ける音がして、俺は瞬間的に青ざめる。

大山の方から謎の鬼のオーラを感じる。

これは、命が危ない・・・！！

すぐ玖美を連れて逃げ出したいが足が震えて全く動かない。

玖美は俺の突然の反応が理解できず、ただ首をかしげるだけだ。

これが、怪物と呼ばれる所以か・・・！！

さようなら皆、短い人生だったけど楽しかったよ・・・あれ、デジヤブ？

「待ってください」

緊迫した空気に突然割り込んだ声。

大山は鼻息を荒くして、俺は恐る恐る振り返る。

そこには一人の男が立っていた。

「・・・何の真似だ天月イ」

マンガかゲームに出てくる悪党のボスみたいなセリフを吐く大山。

そしてゲームかマンガの主人公みたいに堂々と歩きだす天月。

なぜこのタイミングでこいつが出てきたのか分からないが、とにかくありがたい。

おかげで大山のターゲットは俺と玖美から天月へと移り変わった。

「はい、そこで突っ立っている徳野君と彼女のことですが・・・」

天月は俺をチラッと見る。

その目はどこか敵意が混じっているような気がした。

そして次は玖美を見た。

どこことなく疑問と尊敬の気持ちのこもった目に見えた。

最後に大山を見た。

何の感情もない冷たい目だった。

「先生は忙しいことでしょうし、僕が彼女たちの話を聞いておきます。どうでしょうか？」

「・・・はあ？・・・ふむ」

突然の申し出に大山は驚いただろう。

人と関わろうともしない天月が自ら面倒事に首を突っ込もうとしているんだ。

普段の彼を知ってる者なら誰だって驚くだろう。

大山は少し考えるそぶりを見せて答えた。

「まあ・・・お前なら良いだろう。後は任せるぞ」

流石優等生、先生からの信頼も厚いようだ。

天月はどこかに去っていく大山の背にお辞儀をして再びこちらを見る。
据える。

「・・・ついてこい」

天月はこちらから視線を外して、音も立てずに歩きだす。

どこか腹の立つ野郎だが、今回は助かった。

俺は渋々と、しかし意気揚々と後に行く。

玖美も俺の後に続く形でついて行く。

その時見せた玖美の困惑した、そして警戒した表情には俺は気付かなかった。

18 玖美の仲間の優等生

「悪いな。助けてもらって」

俺は背を向けて歩く天月に礼を言う。

しかし天月は振り返りもしなければ、一言の返事もしない。

流石に俺もムツとする。

「・・・」

とことん嫌な野郎だ。

人と一切関わろうとしないし、関わらなければいけないときにも無駄なことは全く喋らない。

クールを装って喋らないのではなく、人のことを蔑むような目つきで見えて関わりたくもないといった感じだ。

あいつが自分以外の誰かと一緒にいるところなんて、世界で誰ひとりとしていないと思う。

「・・・秀輝、あいつは何者？」

ふと、玖美が俺に寄り添い天月に聞こえないように声の音量を抑えて尋ねた。

何者かと尋ねられても、俺はあいつについて知ってることなんかほとんどないので学校ではどんなやつなのかを言った。

「何者って言われてもな……。まあ、1年生にして校内学力トップで運動神経抜群の無口な嫌な奴ってことぐらいしか分からねーぞ？」

俺は玖美に合わせて声を抑えて答える。

しかし玖美は首を横に振って再び尋ねる。

「ごめん、質問を間違えちゃった。あの天月ってやつ、いつからこの町にいるの？」

「え？いつからって……」

そんなこと、分かる筈がない。

ただでさえ誰とも喋らない奴が自分について誰かに語るなんてまずありえない。

しかし、確かに考えてみればいつからいたのか全く分からない。

天月の存在を知ったのは高校に入った時で、それまで奴について情報も噂も聞いたことがない。

奴ほどの秀才ならこんな狭い町じゃあつという間に有名人だろうが、中学の時にもそんな話は聞かなかった。

「・・・分からねーな。あいつに会ったのは高校に入ってからのことだし、それまでは風の噂でだって聞いたことがねー」

「・・・」

俺が正直に答えると玖美は突然黙りこくった。

何かを考えていたような素振りも見せていて、真剣な顔つきは今まで見てきた玖美とは思えないほどだ。

少しばかり黙ってうつむいていた玖美は、パッと顔をあげて俺を見た。

「秀輝！ちよつとこつち来て——」

「僕について知りたいのなら、直接僕に聞いてはどうですか？」

突然会話に割り込んだ声に二人はビクツと少し驚く。

恐る恐る天月を見てみれば、立ち止まって顔だけをこちらに向けていた。

その目を見た瞬間、玖美は獰猛に犬歯をむきだしにして唸り始めた。

「おっと、そんなに警戒しなくて大丈夫ですよ。僕も貴女も同じ『仲間』じゃないですか」

「・・・仲間？」

俺は天月の発言に首をかしげた。

だが玖美も天月も俺のことは気にも止めず会話を進める。

「問題はそこじゃないよ。なんでその『仲間』がこんなところで生活してるのよ」

「大方、貴女と同じですよ。僕も、奴らにですわ・・・」

「ちょ、ちょっと待て。話が分からねーぞ・・・玖美と天月が仲間？なんのだ？それに奴らって何だ？俺にも分かるように説明してく

れ」

話が分からず突然割り込んだ俺を冷ややかな目で天月が睨んだ。

俺を睨んだ天月を玖美が睨み返す。

天月は溜息を吐き、やれやれという風に首を振る。

「これだけ言っても分かりませんか・・・これだから人間は嫌いなんですよ。無能の癖に馴れ馴れしい・・・」

天月はクルリと身体の向きを変え、背をこちらに向けた状態で3歩歩いた。

俺と玖美は天月を見つめ、彼が答えるのを待った。

「奴らと言うのは・・・僕も何者なのか分かりません。何者かは分かりませんが、敵と言うことだけははっきりと分かります」

天月はクルリと回転して再びこちらに向きを変える。

ピッと人差し指を立てて、俺を見た。

「そして、僕は玉藻さんと同じ『妖怪』です。まあ、僕は九尾では

なく天狗の一人ですけど」

18 玖美の仲間の優等生（後書き）

明日テストです。小説書いてるヒマは本当はありません。

19 恐怖と怒り、奴らと故郷

「妖怪・・・？」

天月の言葉に俺は耳を疑った。

あいつが、天月が・・・妖怪だって？

正直なところ、信じられない話だった。

俺の通っている学校に妖怪の生徒がいたなんて信じたくもない。

「いや、でもお前・・・まんま人間じゃねーか」

少しだけ震える指で天月を指して俺は言う。

その姿には妖怪らしいところは見当たらない、人間そのものだ。

天狗っていうのなら翼の一つや二つ生えていたっておかしくないだろうし、鼻だって普通の人間よりも長いと思う。

しかし天月はバカを見るかのような目で、トゲを含んだ言い方で答えた。

「姿形については隣の玉藻さんを見れば良く分かりますが？」

俺は横目でチラッと玖美を見た。

元々生えていた9本のしっぽは綺麗に消えて、金色の耳は髪の毛と
なって跡形もなくなっている。

その姿は（金髪のせいで日本人のようとは言いがたいが）人間そのも
のだ。

ちょっとメンドウだが妖怪が人間になるのも不可能ではないと玖美
が言っていたのを思い出した。

天月が人間と全く同じ姿なのにも納得がいった。

しかし、なんで妖怪である天月がここにいいのか、その理由につい
て何か引かかる。

「奴らってのは・・・何なんだよ？ またお前らとは別の妖怪で、揉
め事でもあったのか？」

俺は天月、そして玖美の二人に聞いた。

返ってくる答えは、うっすらとだが何となく分かった。

事態はそんな軽いものじゃないと、直感が告げる。

二人はそれぞれ別の表情を浮かべた。

玖美は、顔を青くしながら伏せて、足を震わせて始めた。

必死に隠そうとするが、自然と浮かび上がってきたのは『恐怖』だった。

天月は、目を吊り上げて口をゆがめ、拳を固く強く握っていた。

隠そうともせず、剥き出しにされた『怒り』は、周りにいる者までも震えあがらせるほど、大きなものだった。

二人の傷口をえぐってしまったことに気付いた俺は謝ろうとしたが、その前に天月が声を震わせながら答えた。

「奴らは何者なのかは、本当に分かりませんが・・・妖怪ではなかった。妖気を感じませんでしたから。しかし、恐ろしい程の力を感じた。考えられるのは、人間でしょう・・・それも化け物じみた人間・・・!!」

「奴らは・・・突然私の故郷にやってきたの。そして全てを壊していった・・・。抵抗する者は全て殺されて、逃げる者は生け捕りにされた・・・。私は、お父さんとお母さんが罔になってくれたおかげで逃げる事ができたけど・・・他の皆は、もう・・・!!」

玖美は、声を殺して泣き崩れた。

それは、どれだけ辛いことだろうか。

平和だった故郷に、突然人間が現れて全てを壊していく……。

家族も、友達も、親戚も、家も、故郷も……。

それは、俺のようなただの高校生では想像できない痛み、苦しみ、恐怖、怒りだろう。

「僕は、ここで奴らについて調べている。そして、復讐するチャンスがうかがっているんです。それに高校生として学校に通っていれば、奴らも早々手を出せないでしょうから。流石に奴らも事を公にはしたくないんでしょう」

俺は、言葉を失っていた。

そんな酷い事が起きているなんて、知らなかった。

玖美は、そんなにも辛い目に遭っていたんだなんて。

初めて玖美に会ったとき、玖美は必死に逃げてきたところだったのだろう。

その途中で傷を負い、走れなくなって助けを求めていたのか。

「……俺に、なにか手伝えることはないか？」

思わず、口走ってしまった。

しかし、ここまで聞いて何もしないのは心残りだった。

なにか手伝いたい、なんでも良いから力になりたい。

「・・・そう、ですね。なら彼女を守ってあげてください」

天月はそういうと玖美を見た。

当の玖美はいつの間にか復帰して、首をかしげている。

「彼女は、まだ未熟です。戦えるほどの力をまだ持っていないかもしれません。かといって貴方もただの人間、未熟な妖怪よりもずっと弱い。この件に深く関わろうとはしないでください。玉藻さんを、匿ってだけで良い」

「ちょ、ちょっと！私は戦えるよ！？私だって故郷の皆の為に戦うのに、なに勝手に決めてるの！！」

「・・・そうか。分かった玖美は俺が守る。そっちもとつとケリつけろよ」

「だから！なに勝手に決めてるのよ！私はちゃんと戦えるし、秀輝

なんかに守られるほど弱くないよ!?!むしろ私が秀輝を守るよ!?!」

玖美のそのバカ元気に、俺と天月は共に笑っていた。

こんな毎日がずっと続けばな、と俺は思った。

20 今後の予定と入学手続き

俺と天月は今後の活動について話し合っていた。

いや、正確には天月の考えたプランを、俺と玖美が聞くといったほうが正しいか。

「奴らについては僕が調べます。なにか大きな手掛かりを掴んだときに、お二人にも協力を要請させてもらいますが、宜しいですね？」

「でもお前、手掛かりつつたって宛てはあるのか？」

しかし天月は、俺の質問に対して鼻で笑い返す。

「宛てがなかったらこんなことしませんよ。ある程度の情報なら、奴らを観察していれば得られます。この町にも、何人か奴らが潜んでいるんです。恐らく・・・玉藻さんを探しているんだと思いますが、僕にとっては好都合です」

そういうと、天月は意味ありげな笑みを浮かべた。

ただ観察するだけじゃあまり効果はないんじゃないかとも思ったが、妖怪には妖怪なりのやり方が存在するのだろう。

いざというときは、力尽くに事を進めることもいとわないだろう。

天月の態度は良いものとはとても言えないが、どこか頼りになるところがある。

「そして玉藻さんですが、一人にするのだけは好ましくない。できる限り、二人で行動していきましょう。・・・可能であれば、この学校に入学するのが良いでしょうけど」

「はい？ いや、流石に入学手続きだとかは俺には分からねえぞ？」

「そういったことは僕がやっておきますよ。そちらで決めるのはあくまで玉藻さんの意思で——」

「入る！絶対入る！！何が何でも入るからね！！」

「・・・で、では、決定ですね」

「ちょ、待て。そんなあっさり決めちゃって良いのか玖美？」

「うん！だって学校に入ったら秀輝と一緒に居られるんですよ？」

「・・・いや、そう言ってくれると嬉しいんだけどさ。もつとちゃんと考えて、な？」

「うるさい！朝なんて勝手に私を置いてったくせに！おかげで大変だったんだよ！食べ物もないしお腹減ったし空腹で倒れそうだったし！！それに・・・——」

「遅刻しそうだったんだし仕方ねえだろ？しかも全部空腹関係じゃねえか！お前は食い物に飢えた暴食家かよ！？」

「ー！？うるさいうるさい！！二日ぐらい前から何も食べてないんだから仕方ないじゃない！！！」

玖美は耳まで真っ赤にして『バーカ！』と叫んだ。

その声が廊下に意外と響いたので少しひやとしたが、幸いに教師共には聞こえなかったようだ。

俺が声について少しきつく注意したが、玖美は『うるさいバカバカ！！』と叫ぶばかりだ。

流石に俺もイラッ☆と来たので口論を始める。

そんな俺達を天月は少し呆れた目で見ていた。

「とにかく、話が決まったのなら何事も早い方が良いでしょう。僕はこれから校長とでも話し合ってきます。あ、玉藻さんは僕についてきてください。貴方も早く教室に戻った方が良いでしょう、徳野さん。もうすぐ授業が始まりますから」

それだけ言うと天月は、口論をしている俺達に背を向けて歩きだした。

俺の玖美はまだ口論を続けていたが、玖美は天月のことが気になるようだった。

口論を交わす中、玖美は天月の歩いて行った方向をチラチラと見ている。

「・・・早く行って来いって。入学できなくなるぞ?」

俺がそう忠告すると、玖美はこちらを気にしながらも天月の後について行った。

一度溜息を吐いたあと、俺は自分の教室へと戻ることにした。

玖美が入学してくる・・・考えるだけで不安になってくる。

しかしまあ、面白いことになりそうだ。

21 クラスメイトの鋭い視線

教室に戻った俺を待っていたのは、クラスメイトから向けられる多くの視線だった。

男女問わずに向けられる視線には、背中を刺されそうな冷たいものがこめられている。

無論、なぜそんな視線を向けられるのか分からない俺は少し混乱する。

・・・俺、なんかしたか？

そんな疑問を抱きつつも、できるだけ周りの視線を気にしないように努めながら自分の席へ座る。

因みに、俺の席は窓際にあって一際目立つようなことをしなければ、視線が集まったり目立ったりすることはまずない・・・筈だが。

「視線が・・・視線が痛い・・・」

一点に集中する鋭い視線に、思わず声を漏らしてしまう。

どうしてこうなったのか、そう考えるが心当たりなんてまるでない。

そんな中、授業開始を知らせるチャイムが鳴り、俺を救ってくれた。

視線が一瞬で分散するが、やはりまだ少しの視線を感じる。

10秒もしない間に、担任が教室に現れる。

今から始まるのは五時間目で、教科は確か英語だったか・・・。

よし、居眠り決定。

自慢ではないが、真面目に勉強しなくてもテストで平均は取れるんでね。

え？テストは良くても成績は下がるんじゃないかって？・・・気にすんなくて！

幸いなことに、窓際の席ってのは居眠りしてても担任にばれにくいんだよ。

それにほら、夜にあるバイトに備えて眠つとかないと疲労でぶっ倒れそうになるんだぜ？

俺は机に突っ伏して、目をゆっくりと閉じた。

授業中でも向けられるしつこい視線は無視して、俺は浅い眠りについていた。

21 クラスメイトの鋭い視線（後書き）

今回は短めで。

あと、しばらく更新ペースを遅くさせていただきます。

22 ヤンデレ幼馴染涼香

「・・・シュウ、・・・ちゃん。シュ・・・ちゃん！起きてシュウちゃん！もう学校終わったよ！」

「んあゝ・・・あと5分・・・」

「遊んでないで早く起きて！！帰る準備はしてるから、あとは起きるだけだよ！！」

デジャヴを感じさせることを言う涼香を尻目に、俺は一層にだらしなく机にへばりつく。

ああ、もう学校が終わったのか・・・、と口の中で呟く。

今日はほぼ丸一日眠っていた、朝のハプニングのおかげで疲れていたのかグッスリとだ。

・・・家に帰って一休みしたらバイトだな。

俺は気持ちを切り替えて机から離れる。

もう他の奴らは帰ったのか、残っているのは俺と涼香を除いて居残りかがり勉君の数人だけだ。

俺を心配している涼香にそう良い、涼香の持っていたスクールバックを受け取って教室を出た。

部活に勤しむ生徒の声を聞き流しながら、学校を出て帰宅路につく。

俺の家はまだ学校から近いが、涼香の家は学校から大分遠いので歩いて帰るとかなり時間がかかる。

別に、自転車通学が禁止されてるわけでもないのだが、涼香は『シユウちゃんと一緒に帰れるなら歩きたい』とか言って自転車に乗ろうとしない。

・・・途中まで自転車を降りて進んで、別れてから自転車に乗って帰れば良いと思うんだけどな。

そうこう考えてるうちに我が家ことアパートが見えてきた。

相変わらず、涼香は俺の一步後ろをついてくる。

俺の家のあるアパートは涼香の帰宅路通学路の途中にあるため、家に着くまでずっと涼香と一緒に帰ってくることになる。

・・・別にかまわないのだが、無言でただニコニコとついてくる涼香には時に得体のしれない不気味さを感じる。

「そんじゃ、もう家に着くしじゃあな」

「うん、それじゃまた明日ね……。あ、シュウちゃん。ちょっと待って」

「ん、なんだ？手短に頼む」

「うん……。あの……。その、ね……。」

涼香はそこで言葉に詰まると、顔を俯かせ胸の前で指を弄り始める。本当に言っているのか、言ってはマズイのではないかと迷っているようだった。

数秒の間を置いてやがて決心したのか、思いっきり息を吸って少し大きめの声で尋ねた。

「シュウちゃん！……。今日学校に来た、金髪の女の子と知り合っているのは、本当？」

瞬間、空気が凍った。

なぜだ。

なぜ、涼香が玖美のことを知っている？

いや、あれだけ大勢の前だったのだ・・・もう学校中に噂が広まっていたとしてもおかしくない。

しかし・・・よりによってなんで涼香に・・・！

「・・・あ、あはは。それじゃまた明日――」

俺は一刻も早くこの場から逃げ出そうと足を踏み出したが、神業のようなスピードで涼香が俺の右腕を掴んだ。

一瞬、心臓が止まりそうになり、俺は恐る恐る振り返る。

涼香は完全に俯き、表情は分からない。

だがその小さな口が、早口に動いていることはすぐに分かった。

「シュウちゃん、なんで逃げるの？言えないの？どうして？」

「いや、あの、言えないことはないんだけど・・・。アレだ、アレだよ・・・ええと・・・」

「どうしてそんなに焦ってるの？顔、真っ青だよ？ねえ、どうして逃げようとするのかな？」

・・・マズイ。

これは非常にマズイ。

涼香はすでに『病涼モード』に突入しているのかもしれない。

『病涼モード』というのは、涼香が病んで病んで精神的にヤバイ状況のことを指す。

もっと分かりやすく言えば『ヤンデレ』というもので、基本的に大人しいが一定の条件を満たすと精神が病んで暴走するのだ。

解説Ⅱ新一、命名Ⅱ新一、情報源Ⅱ新一、詳しい事は新一に聞いてくれ。

因みに、俺はこのネーミングと解釈の仕方がどうも許せないの、これ以後は使わないことにする。

とにかく、今の状況はヤバすぎる。

涼香は未だに俯きながら、呪詛を呟くかの如く小声で囁き続ける。

一刻も早く逃げなければ、こちらの身が危うい！

「とと、とにかく！俺もうバイトあるから！！だからもう帰るから

――」

「おお、やっぱり秀輝だ！声と匂いがしたから見に来てみたけど、

そっちの女の人間は誰？」

逃げる準備をしていた俺の頭上から、声が降り注ぐ。

声の方向に振り向くと、そこにはアパートの玄関のドアを開けっ放しにしてこちらを見ている玖美の姿が。

なぜこのタイミングで玖美が？と思ったが、恐らく天月がここまで付き添い案内したのだろう。

そして、あまりにもタイミングが悪かった。

玖美が俺の部屋から飛び出したのを、涼香は見逃さなかっただろう。後ろの方からどす黒いドロドロしたオーラと共に、なにかがブチ切れる音が聞こえた。

22 ヤンデレ幼馴染染涼香（後書き）

そろそろテスト・・・（´・ω・｀）

23 女と女のぶつかり合い

「秀輝、早くご飯作ってよ。もうお腹ぺこぺこ・・・」

玖美はアパートの鉄柵から身を乗り出して、道の下真ん中に突っ立っている俺に声をかける。

しかし、俺は動けなかった。

背後から放たれる殺気とも狂気ともとれる負のオーラに当てられ、体中の筋肉が恐縮してしまっているからだ。

喉元に刃物を押しつけられ、心臓を鷲掴みにされ、今にも握りつぶされそうな感覚さえ覚える。

以前にも一度、一度だけ似たような体験をした。

思い出したくもない、小学生のときだ。

特別仲の良かった女子と遊んでいるとき、ふざけて背中から抱きついた直後、気が狂いそうになるほどのオーラを感じて一瞬で意識が飛んだからだ。

その時は、防衛本能が働いた・・・のだと思う。

しかし、今回はそうは行かなかった。

あのときより一層強くなったオーラは、気絶することさえ許さない。

「シュウちゃんシュウちゃんシュウちゃんシュウちゃんシュウちゃんシュウちゃん」

怖エエエええええッ！！

助けて！！俺をここから連れ出してくれー！！

真っ青になり、汗をダラダラ流して必死に声を出そうとするが、口元がひくつくだけでやはり声は出ない。

しかし、声はなくとも玖美には俺の様子がおかしいことに気付いたようだ。

玖美は首をかしげながらさらに身を乗り出し、そのまま、飛び降りた。

「ぼッ・・・！？」

いきなりの出来事に、俺はかすれた声を漏らしただけで、動くことができなかった。

俺の体を縛っていたオーラも、いつの間にか消えていた。

視界の端に見えた涼香の表情は、驚愕に染まっていた。

俺の部屋はアパートの三階に存在する。

そして、玖美はそこから、三階の高さから躊躇なく飛び降りたのだ。ヘタをすれば骨折、しなくても足首を強く痛めるだろう・・・最悪、死ぬかもしれない。

だが。

ふわりと。

玖美は、まるで羽毛が舞い落ちるように、静かに着地した。

スーパースローカメラで撮られた映像を見ているようだった。

天使が舞い降りる瞬間、とも錯覚しそうだった。

トンッ、と。

玖美の鳴らした足音が、俺を現実へと引き戻した。

「どうしたの、秀輝？ポカンとしちゃって。そんなことより早くご飯作ってよ」

「あ、ああ、そうだな。ちょっと待ってろ、すぐ作ってくるから・・・って、そうじゃねエエええ！！お前なんで三階から飛び降りてんだよ！！自殺希望者かお前はッ！？」

「えー、だって階段降りるのメンドクサかったんだもん」

「メンドクサかったってお前……。くそっ、心配かけやがって・・
」

「しゅしゅしゅシュウちゃん、そその子だだ誰？ ななっなんで三階から飛び降りて平気なの!？」

「・・・・・あー・・・」

今度こそ、マズイ。

先程のようにヒステリーは起こしていないものの、この流れでは誤魔化しようがない。

それに、先程の玖美の行動についてもどう説明すればいいものか。

この状況、どうやって切り抜けるんだ、俺・・・。

不意に、俺はさわやかな笑顔を浮かべ、涼香を見つめる。

戸惑いながらも、なぜか顔を赤める涼香に向かって俺はこう嘘を吐いた。

「従妹ですうぐぼお」

直後、急接近した涼香に殴られた。

殴り飛ばされながら、俺は思った。

やっぱばれたか、いや当たり前だ。

ドゴッ！！と音を立てて、俺は地面に倒れる。

「シュウちゃんの家系にそんな金髪の子がいる筈ない。本当のこと言って、なんで嘘ついたの？」

「痛つ……。ったく、ただの居候みたいなものだよ。訳あって匿ってるんだ……。でも、幾らなんでも殴ることあねえだろ」

「ごめんね、やっぱ痛かったよね……。でも私、隠し事されるのが大っ嫌いだから……」

シュウちゃんのことに限ってだけどね、と聞こえたが気の所為にしておく。

しかし、まあ。

涼香の言うとおり、隠し事をされて快く思う人なんていないだろう。

だが、今は事情が違う。

玖美は妖怪で、『奴ら』という謎の人物、または組織に追われている。

そんなこと、バカ正直に言える筈がない。

それ以前に、信じてくれる筈がないだろう。

だから誰かに言うことはできなかったし、言いたくなかった。

決して嘘は吐かず、かと言ってはつきりもしない曖昧な答え方で俺は答える。

恐らく、涼香はもっと詳しいことを知りたがると俺は思った。

しかし、涼香は俺の予想とは全く違うところに突っ込んだ。

「で、でもそれじゃあ、シュウちゃんはその人とその、ふふふ二人暮らしてことになるんじゃない……」

「え？まあ……そうなるな」

「いいいけないよシュウちゃん！！シュウちゃんは男の子なんだから！！誘惑に負けてシュウちゃんがその人と一夜を共に過ごすことになるでもしたら……！！」

「いや、なんの心配してんだお前は……。そんな展開流石にありえねえから」

俺は言うが、涼香は聞く耳を持たない。

自分だけの世界に入って独りでボソボソと呟いている。

なにを言ってるのか聞こえないが、なんて言ってるのか聞きたくもない。

時々顔を真っ赤にして鼻息を荒くしている時点で、ろくなことを考えていないのは明白だ。

涼香はしばらくプルプルと肩を震わせてから、バツ！！と顔をあげて突然叫んだ。

「決めた！！私、ここに住む！！そうすればシュウちゃんがその人と特別な関係になることを阻止できる！！」

「・・・は？え、このアパートに住むつもりなの？」

「うん！確かシュウちゃんのお隣の部屋空いてたよね？そこならシュウちゃんにいつでも会えるし、監視もできる！！」

「ちょっと涼香さ〜ん？いきなり過ぎて話について行けないし、なにやら不穏な言葉が聞こえた気がするんですが？」

俺は言ったが、やはり涼香は聞く耳を持たないようだ。

涼香は無意味なほどにテンションを上げて、玖美に指をさして尋ねた。

「そこの貴女！！お名前は？」

それまでポカーンとしていた玖美は、突然のご指名で慌てふためいた。

あわわあわわ、としばらく騒いだ後、呼吸を整えてから答える。

「私の名前は玉藻玖美だよ。貴女の名前は？他人に名前を聞いたのなら、自分も名乗るのが礼儀でしょ？」

「玖美さん、ね。私は空野涼香です。以後、宜しくお願いしますね」

その瞬間、二人の視線の間から火花が散った・・・ように見えた。

俺は、再びオーラが発せられるのを感じた。

しかしそれは、先程の涼香の負のオーラではなく、もっと、なんと
言うか、熱いものだった。

青春物のマンガで、主人公とそのライバルがぶつかり合う瞬間のよ
うな。

バチバチィ！！と視線が互いにぶつかりあう幻聴さえ聞こえそうだ。
そんなある意味緊迫した空気の中、涼香がなにかを思い出したかの
ように顔を上げた。

「そうだ、シュウちゃん。バイト、行かなくても大丈夫なの？」

それを聞いて、俺はあることを思った。

・・・間に合うかな。

23 女と女のぶつかり合い（後書き）

やっぱいいタイトルが思いつきません。

24 空腹感とバイト先

「ちょ、ちょっと秀輝！！そんなに急いでどこに・・・もう、どこに行くかぐらい教えてよー！！！」

「うるさい黙ってついてこい！！ちくしょう、少しでも遅れたらお前らの所為だからな！！！」

だからなんなのよー！！と叫ぶ玖美は無視して、俺は町中を全力で走る。

アパートの前で涼香にバイトのことを指摘されたときはゾツとしたが、このペースならなんとか間に合いそうだ。

とはいえ、少しも休憩を取れなかったのはキツイ。

せめてパンの一枚や二枚食べたかったが、制服から着替えてケータイと財布を持つてくることしかできなかった。

自転車に乗ればもっと早くバイト先につくだろうが、天月との約束を守る為にも、玖美を置いて行くわけにはいかない。

あいにく、俺の自転車は二人乗りのできるようなフォームじゃないんだ。

そうこう考えながら、俺は陸上部にスカウトされそうな勢いで走り続ける。

「しゅ、秀輝・・・私もう駄目・・・。お腹が減り過ぎてもう走れない・・・。」

「もうちょい頑張れ、いや頑張ってください！！着いたら飯おごつてやるからさ！！」

早くも疲れきっている玖美を励ましながらも、ただ全力で走る。

しかし、かくいう俺も激しい空腹感に襲われている。

昼飯は、たった三個のパンと一パックの牛乳だ。

さらにいつにもまして激しい運動をしているんだ、空腹感の一つや二つ覚えるのは仕方ないことだ。

だが、玖美は俺とは比べ物にならないほどの空腹を覚えているのだろう。

学校で、さりげなくだが二日前からなにも食べていないと言っていた。

その時は聞き流してしまっただが、二日間なにも食べないというのはかなりの苦痛だろう。

・・・バイト先につけば、早くなにか食べさせてやらないとな。

「ほら、あそこに見えてきたぞ。最後まで頑張れ!!」

「ふえ〜ん……。本当におごってくれるんでしょうね……。?」

「ああ、マジだから頑張ってくれ!! てかもう無理矢理連れてくぞ!!」

「え、無理矢理ってなに……。きゃー!!」

俺は少し後ろに下がり、息絶え絶えな玖美の手を掴んで一気に走る。

玖美は如何にも女の子らしい悲鳴を上げたが、手を振り払おうとはしなかった。

なぜか頬を赤く染めて、視線を横に逸らされたが、そんなことは気にしない。

とにかく、今はバイト先へ急がなければ。

すでにバイト先の店は数十m先に見えている。

店の名前は『松坂屋』……。分かりにくいが、うどん専門店である。

うどん専門なだけに、うどん以外は何も無い。

しかし、うどんだけなら恐ろしいほどのメニューがある。

そんなうどん屋こと『松坂屋』はもう目の前だ。

ゼエゼエと苦しそうに呼吸をする玖美はさて置いて、俺は『松坂屋』の飾りつけのない襖にも似た扉に手をかけた。

24 空腹感とバイト先（後書き）

かなり無理矢理感がありますね・・・。

昨日まで統一テストだったので、小説考えるヒマがなかったと言い訳させてください。

25 バイトと漢のおっちゃん

「悪いおっちゃん!! 少し遅れたかもしれないねえけど、セーフか!？」

俺は扉を勢いよく開け放ち、店中に聞こえるよう大声で叫ぶ。

元々、店は小さいため大声を出さなくても十分に聞こえるのだが、そこはまあ、勢いだ。

で、営業中の店の中で大声を出せば、勿論のこと自然と視線が集まってくる。

しかし、集まった視線も俺の姿を見た瞬間、これも自然と分散していく。

俺がこの店で働いているというのはすでに周知の事実、常連さんにとってはいつも通りの光景であって、初めて訪れたお客さんにだって俺の若さからしてアルバイト君と察してもらえるだろう。

「おう!! 大丈夫だから安心しなっ!! しっかり珍しい遅かったな。なんかあったんか？」

店の奥から威勢のいい男性の声が返ってきた。

声の主は『松坂屋』の店主、通称『松坂のおっちゃん』である。

いや、そのまんまじゃねえか!! などといったコメントは控えて頂きたい。

「や、ちよつとごたごたに巻き込まれ・・・た、でいいのか? 元々嵐の中心にいたようなもんだから巻き込まれたっつう表現は正しく・・・いや、そんなことはどうでもいい!! 色々と遭ったってことにしといてくれ!!」

「ゼエゼエ・・・ちよつと秀輝ゼエなんでこんなところにゼエ無理矢理連れてきたのかゼエ説明してくれるんでしようゼエねエ!!」

俺が一人で変な疑問を抱いて、一人で勝手に解決した直後だった。

息絶え絶えとなった玖美が数歩遅れて店内に突入、そして俺に向かって大声で不満をぶちまけた。

今度こそ、完全に視線が集まった。

当たり前だ。

常連さんから見ても初めて見た女性で、さらにはかなりの美少女ときたんだから。

驚きの視線と、いやらしい視線と、嫉妬の視線が一点に集中する。

しかし、視線の的となっている玖美は一切動じず、俺に攻め寄り問い詰める。

「さあ秀輝！！早く私に説明してよ！！そして五秒以内に美味しいご飯を用意して！！」

「いや、五秒は無理だろ五秒は。せめて5分は待って下さい。そして説明については、ここは俺のバイト先な。それ以上でもそれ以下でもない」

なにがそれ以上でそれ以下でもないのか自分でもよく分からないが、なぜか玖美は妙に納得いった表情でふんふんと頷いていた。

・・・そもそも、バイトってのがなにか理解しているのだろうか。

「おうおう秀輝、なんやら騒がしいけどどしたよ？」

騒ぎを聞きつけた松坂のおっちゃんが、店の奥からひょいっと姿を見せる。

その体軀はうどん屋の店主のくせに、まるで数十年鍛えぬいたベテラン格闘家のようなたくましい筋肉で覆われている。

そしてこのおっちゃん、とても性格がよく老若男女問わず地域の人から好かれていて、『松坂のおっちゃん』と親しまれている。

そのまんまである。

「おうおう秀輝よお。誰でい、その別嬪さんは？お前エみてえな野郎にや勿体ねえなあ」

おっちゃんはなにをどう解釈したのか、ニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべる。

対して俺はそのことについては特に取り合わず、無表情で話を進める。

「なんでもねえっすよ。あえて言うならただの知り合いつてとこっすね。それとおっちゃん、玖美にうどんを一杯頼む。代金は後で払うからさ」

そして俺は目の前の玖美を指差す。

指を差されたのが不満なのか、ただの知り合い呼ばわりされたのが不満なのか、玖美はムスツと頬を膨らます、悔しいけど可愛かった。

バカ正直に『居候です』なんて言ったら、なにをどう勘違いされるか分からないのだから仕方ないだろ。

しかし、松坂のおっちゃんは再びなにをどう解釈したのか、さらにニヤニヤと気持ちの悪い笑みを浮かべ始める。

「玖美つつうのか、そうかいそうかい。秀輝、お前エも幸せ者だなあ。玖美ちゃんよ、ちょっと待ってな。すぐにとびつきり美味いうどんを作ってくるかなー!!」

おっちゃんはガハハ!!と豪快に笑いながら店の奥へと立ち去って行った。

相変わらず色々とパワフルだ、それでいて憎めない。

しかしまあ、美味いうどんを作ってもらえるのならそれに超したことはないだろう。

未だ楽しげにニヤニヤと笑う客がチラホラ見えるがもう気にしない。

「そんじゃ玖美、お前はそこら辺の席に適当に座つとけ。すぐにうどんが来ると思うから」

「ん? 秀輝はどこに行くの?」

「着替えてくるだけだよ。流石にこの格好じゃ働けないだろう? すぐ戻るから待ってろって」

なにか言いたげな玖美を抑えて、俺は店の少し奥にある質素なドアを開けて休憩室に入る。

そして綺麗にたたまれてある見慣れた茶色の地味な服に十秒で着替える。

松坂屋指定のバイトの人専用の服装だ。

バケツにかけてあった雑巾を手に取り、部屋から出る。

俺の仕事は至って簡単。

うどんの汁などで汚れたテーブルの拭き掃除と、モップを使つての床掃除だけだ。

しかも仕事内容が楽なわりにバイト代は結構高い。

現在は俺のメインバイトとなっている。

早速仕事を始めようと意気込んでいた俺だが、突然現れたおっちゃん俺を遮った。

いきなり過ぎて少し驚いている俺に、おっちゃんは力強く言った。

「おい秀輝。お前エはあの子と一緒にいてやれ」

「え？でも、俺には仕事が・・・」

「んなもん、別にいいんだよ。あの子・・・玖美ちゃん、寂しそうだったぞ？女性のあんな表情を見ちまったら、居ても立ってもいら

れねえ。早く行け。あの子と一緒にいてあげろ。・・・それが、漢
ってもんだろうが」

それだけ言うと、おっちゃんは店の奥へと消えた。

その時見せた背中には、とてもたくまשיき漢の魂の一角が見えた（
気がしたただけだ）。

おっちゃん・・・あんたこそ、本物の漢だ・・・！！

「・・・ありがとう、おっちゃん」

俺はすでに姿を消したおっちゃんに礼を言って玖美の元に向かって
歩いて行った。

・・・え、走れって？

店が狭いから歩いてもすぐ着くし、メンドクサイから勘弁。

26 ちょっとした出来心

俺はゆっくりと、気付かれない様にこっそりと玖美に近づく。

抜き足差し足忍び足、首うずめてコソ泥じみた動きをする今の俺には、ピンクパンサーのあのBGMがこの上なく似合うだろう。

なぜ気付かれないようこっそり近づくのかと聞かれれば、それは驚かすために決まっていると言わせてもらおう。

なぜ驚かすのかと聞かれたら、ただの気分としか答えようがないだろう。

そう、ただの気分だ。

おっちゃんが言っていた通り、とても不機嫌そうで寂しげに店の壁にたてかけてあるメニューを眺める玖美の姿を見た瞬間、なにを思ったのか驚かそうと決めた、決めてしまった。

そんなこんなで俺は店のあちこちに並べられたテーブルに隠れながら、玖美との距離を詰めていく。

勿論、うどんを食べている客が俺のことを不審そうに見るが、特に文句も言われないので（本当は良くないが）別にいいだろう。

あっという間に玖美のすぐ後ろにまで近付いた俺は、ニヤニヤと笑いながら両手を上げる。

玖美はまだ俺の存在に気付いていない。

両手で玖美の型を叩くと同時に、俺は声を抑えて叫ぶ。

「・・・わあ!!」

「きゅうッ!？」

「!?!?」

玖美を驚かすのには成功はした。

しかし頭と腰辺りからボンツという音と共に白い煙が現れ、耳としっぽがひよこつと姿を見せたことに、俺は身が飛び出さんばかりに驚く。

玖美もそのことにすぐに気付き、『あわわわ!!』と手を振り回して慌てながらもすぐに耳としっぽを消したのはグッジョブ。

俺はすごい剣幕でギョロギョロと店の客に目を向けるが、幸いこちらの異常に気付いた客は居ないようで、客同士で会話しながらうどんをすすっている。

俺はホッと胸を撫で下ろすが、まだ安心することはできないようだ。

玖美が顔を真っ赤にして目に涙を浮かべながらも俺のことを殺気のコモった眼で睨みつけている。

玖美さんはとってもご立腹のようです。

「や、悪い玖美。今のはちよつとした出来心で——ぐはあ!!」

謝ろうと口を開いた直後、俺は玖美から強烈な右ストレートを右頬に貰い吹っ飛んだ。

威力のあまり、俺は空中をクルクル回りながら思った。

・・・ああ、デジャヴ、涼香にも殴られたよな俺。

なんでだろう、涙出てきた。

蛍光灯の光を浴びてキラキラと輝く透明な液体を撒き散らしながら、俺は『ぶぐッ!!』と情けない声を上げて顔面から倒れこむ。

しかし、玖美の怒りは収まらない。

倒れたままピクリとも動かない俺の背中に馬乗りになって、ポカポカの四倍ほどの威力で俺の頭を叩き始める。

「バカバカバカ!! 秀輝のバカーッ!! バカ秀輝!! バカバカ秀輝!!
バカバカバーカ秀輝い!!」

「痛たたたた!! 痛いストップ止まれえ!! やり過ぎだろ!!」

オーバーキルだよオーバーキル!! てかなんでそこまで怒ってんの! ?」

玖美の全力の猛攻から、俺は両手で必死になって頭を守る。

店の中はすでに爆笑の嵐だ。

松坂のおっちゃんも店の奥から満足そうに頷いているのも見える。

・・・見てないで助けてくれよおいッ!!

「全く・・・貴方達二人はなにをしているんですか?」

「ん?」

頭上から聞こえる聞き覚えのある男の声に、俺は小さく声を漏らす。

気付けば玖美の猛攻の手も止まっている。

俺は恐る恐る目を開くと、目の前の学校指定のズックが目に入った。

そのまま視線を上に向け、そこに立っていた男の名前を呟いた。

「・・・天月?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5776u/>

俺と九尾の女の子

2011年11月27日14時34分発行